たゆまぬチャレンジの根底にあるまちづくりの精神

2

有馬温泉旅館協同組合 専務理事
一般社団法人有馬温泉観光協会 副会長
株式会社御所坊 代表取締役社長
金井 啓修

絵に描いたような青い海と白い雲。子供たちが波打ち際ではしゃぐ光景を見ながら、自分の運の無さと今後のことを案じていた。

観光客のいない観光地は寂しい。宿泊客は我々家族だけではないのかと思うほど閑散としていた。子供たちも飽きてきて「どこかへ行こう」と言い出した。

あれは阪神・淡路大震災発生直後から親元に子供たちを預けて約ひと月という頃。さすがに寂しくなったのか有馬に帰りたいと言ってきた。我々夫婦も震災発生後から忙しく走り回っていたので二月の連休の休みを利用して、神戸を離れて沖縄まで気分転換にやってきた。

琉球ガラスを見学に行った。そこで赤色の一輪挿しを見つけた。価格を見ると旅館で使用するには少し高い。スタッフもすぐに割ってしまうのではないだろうか？ ひょっとしてお客様が持って帰らない？などと心配してしまう。

「そうだ！ ギャラリーを創ろう！」

なぜか、考え方はいつも飛んでしまう。起承転結でなく〝起結転承〟。思い起こせば小学生の算数の応用問題でもそうだった。答えを見つけ、後から式を作成する。

今回は、僕がまちづくりを実践する上で感じているいくつかの必要な要素、人とのつながりやものの考え方、発想などを、阪神・淡路大震災（一九九五年一月十七日、以下、震災）での取り組みやエピソードを例に挙げてみたい。

1 ギャラリーを創ろう！

～朝食で旅館のレベルが分かるように、ギャラリーがあるかどうかで温泉地の文化度が分かる

ギャラリーを創ると少々高い器や備品も卸価格で手に入る。それを販売する。売れれば、旅館の備品、商品見本と考えたらよい。それに、作家が集まれば旅館や地域の質が向上する。なぜなら作家はモノづくりのできる人たちで創造力やネットワークを持っている。ネットワークが広がるといろいろな〝人〟、〝モノ〟、〝コト〟が集まる。すなわち温泉地の文化度が向上する。

震災で崩れた蔵の漆喰（しっくい）壁を補修した。クラフトや人の手によるモノを活かすために民芸調にならないように気をつけて改装を行った。吹き抜けの二階は展示会を開くスペースとした（「ギャラリー・レティーロ・ドゥロ」）。この場所からいろいろな

写真1 震災後、人、モノ、コトのつながりを生み出した「ギャラリー・レティーロ・ドゥロ」（写真提供：筆者）

人とのつながりができ、多くの作家や文化人とのつながりが構築できた。

2 芸者さんのビアガーデンをやろう！

～ピンチをチャンスに、災いを福に転じさせる発想と行動力、温泉地の団結力と本気度が試される！

僕が子供の頃、御所泉源のそばに「竹の家」というどん屋があった。学校は試験期間中、午前中で終わるので、昼食はいつも竹の家だった。店の中央に大きなテーブルがあり、茹で玉子が籠に盛られて置いてある。

竹の家の並びに検番（練習場）があり、芸者さんたちが三味線や踊りの練習をしている。時々温泉上がりの浴衣掛けの芸者さんたちと一緒になる。かつおの利いた出汁の香りを打ち消すように、甘い白粉の匂いが鼻をかすめる。

正月の伝統行事「入初式」にかりだされ、直会で芸者さんに酒を勧められる。盆踊りというと芸者さんが総出で踊る。何かよく分からないが温泉街に暮らす独特の習慣と芸者さんは、幼い頃から体に刻み込まれていた。

「窮鼠猫を噛む」「火事場の馬鹿力」という言葉があるが、災いを転じさせる発想は日ごろの遊び心から生まれるモノだと思っている。オーバーヘッド・キックやカウンターパンチのように、発想も練習していなければ生まれない。

震災の年の六月だったと思う。「一週間でイベントを二つ考えろ」と観光協会から言われた。瞬間に生まれたのが、温泉入浴と昼食をセットにした日帰りプラン（〝ランチス〟クーポン）。これは有馬の温泉街の活性化につながった。もう一つが「芸者さんのビアガーデン」。

当時、有馬川の河底を親水公園に改修中だった。震災がなくても夏休み期間中は家族連れが多く、芸者さんの需要は少ない。まして震災直後、観光客は皆無で宿泊しているのは工事関係者だけだった。

県の上層部に掛け合う者、周辺商店主を納得させる者、実際の運営に携わる者、皆が一丸となって「有馬涼風川座敷」の開催にこぎつけた。これは、芸者さんを支えるイベントと言ってよい。震災復興という〝アドレナリン〟が我々を突き動かした。

二十回目の今年のオープニングで知事が挨拶に立った。「今では到底できないことだったが、震災復興ということで全面的に支援した……」。時々、来られる方が「どうやったらこのようなことができるの？」と驚くが、平常時だったらとてもできなかっただろうし、最初の立ち上げのエネルギーは出なかったと思う。

写真2 有馬温泉の底力を象徴する「有馬涼風川座敷」（写真提供：筆者）

大雨で設備が流されたこともある。しかし我々はすぐさま復旧を行った。今年も記録的な大型台風で根こそぎ設備を流されたが、有馬の青年部は翌日から再開に向けて土砂を撤去し、新たに桟敷を作り直した。有馬は長い歴史の中で三度震災に遭っているが、その都度蘇生してきた。そのDNAは確実に受け継がれている。

新型インフルエンザの風評被害（二〇〇九年）のときも同様だった。たちまちキャンセルで観光客が有馬から消えてしまった。誰もが見えない菌におびえてしまった。

「皆で掃除をして街をきれいにしよう！」各事業所に声を掛ける者、掃除道具を手配する者、予想を超える人々が集まった。そして橋の欄干やあちこちの清掃を行った。観光客は皆無だったが驚くほど多くのマスメディアが殺到した。口の悪い同業者からは「有馬は逆手にとって宣伝し、元を取った」と言われたが、それは褒め言葉と受け止めた。

その後、「かえるキャンペーン」と称してリピート券を配布。お客様

に戻っていただくためのイベントを次々に行った。

その一つ「有馬旅館福袋」という宿泊プランを作った。それこそ顰蹙（ひんしゅく）を買うほどヒットした。有馬の町を一つの宿に見立てて、観光案内所で予約を受け付け、チェックインも観光案内所。お客様はコインロッカーの鍵を選んで開けると旅館のパンフレットが入っていて、その旅館にご宿泊という仕掛け。観光案内所には電話が四回線あるが、朝から晩までどの電話も鳴りやまなかった、それも一週間。ピンチをチャンスに変える発想をマスメディアの人は好んで取り上げてくれる。

3 湧くはずのない所に、湧くはずのない湯が湧く

〜子供のように「なぜ?」「なぜ?」という知的好奇心と探究心があれば、今後の旅人のニーズをつかまえることができる

映画のように次々とピンチが訪れる。日本のあちこちで温泉疑惑問題が起こった。同時に掛け流し絶対論を唱える人も現れた。かと思うと、レジオネラ菌という得体の知れない菌が現れた。

「そろそろ一杯飲みながら対策を考えようか」とのんびり会合を招集したその矢先、有馬の温泉疑惑問題が噴出した。知り合いの記者が、こっそり知らせてくれ、隠すより公開した方がよいとアドバイスをもらった。

たまたま震災以来、有馬の温泉のメカニズムや問題点を調べていたので、僕が記者会見で、有馬の旅館の温泉の情報開示を行った。今でもあれほどのマスメディアに囲まれたことはない。そして、これを機会に神戸市行政も含めて有馬の温泉の問題を解決する方向に歩み出した。

火山のない近畿地方で、たった二百メートル下から沸騰する温度の温泉が湧き、その成分には中国が月に探査船を飛ばして欲しがるヘリウム3も含まれている。

しかし、この有馬の温泉の特殊性を語ると日が暮れる。これをもっと分かりやすく楽しく説明する必要がある。有馬のラドンやラジウムを活用した「生レバ特区」の申請、高温の金泉から噴出する炭酸成分をその場で水に混ぜ込ませる「天然サイダー作り（実験）」、上部マントルの成分を説明する「戦隊ヒーローマントルマン」の結成などなど。いろいろな方法で理解していただけるよう努めている。

有馬の特殊な温泉は世界中探してもない。現在、有馬ではこれを中心に据えて有馬温泉のブランド構築に動き出している。

4 助平心こそ、重要だ！

〜自由な発想の源泉は人の素直さから生まれる

人生の師と仰ぐ某氏は、いつも〝下ネタ〟を交えながら、難しい哲学を分かりやすく話してくれる。「外国人も偉そうな人でも下ネタを話すと、仲良くなれる」という。師に倣って、私も関西弁と下ネタを多用して話すことが多い。

三十余年前、有馬のメインストリート「太閤（たいこう）通り」を歩行者天国にして、〝人間モグラたたき〟や〝ハムスタールーレット〟など、手作りのゲームの屋台を出す祭りを考えた。その祭りで、僕がかつてショックを受けた、外国人の参加した神戸北野天満宮でのゲームをやってみた。

それは素肌に白いTシャツを着た女の子を、水の入った灘（なだ）の酒樽（さかだる）に落とすゲームだ。外国人には普通でも特に有馬のご婦人方にはショックを与えた。以来、僕は奇人変人と称さ

写真3 皆でバーデンバーデンに温泉保養文化を学ぶ （写真提供：筆者）

れるようになったのだが、その当時の小学生たちにも大きな衝撃を与えたようだ。今でも彼らは酒を飲むとそのときのことをよく話題に出す。

その彼らが中心となって、有馬のまちづくり計画の草案を作成した。僕は「混浴を楽しもう!」と先進地視察にバーデンバーデンを選び誘った。そしてシュトットガルトで本場のビール祭りを体験してもらった。参加者は総勢二十五名を超えた。

皆で共通の本物体験をするということは重要だ。これは震災後、仲間と合資会社を設立し、「有馬サイダー」を復活させたプロセスと共通するところが多い。

5 多数決で決めてはならない!

〜有馬の水のラベル選定で、某デザイナーが若手に言ったこと。「好きなのに決めろ、ただし、多数決では絶対に決めるな!」

若手が作成した草案を基に、『有馬温泉まちづくり基本計画』が議論された。その中で、有馬温泉の緊急・重要な課題は何かというアンケートを取ると、「公衆トイレ建設」というのが大多数の意見だった。僕はおかしいと思った。公衆トイレを作るだけで観光客がどんどん来て、素晴らしい街になるのか? なるわけがない。

それにしてもなぜトイレなのか? トイレ建設は総論賛成でも実際に作るとなると、反対意見や問題が起こると行政関係者は言う。「そりゃそうだろう、誰がきれいに維持管理するのだろうか?」そこで最近多用しているあるアンケートを行ってみると、いろいろ興味深いデータが集まった。

データを基に人々を説得し、納得させて4「助平心こそ、重要だ!」で述べたように〝トイレだけに少し艶っぽく〟、3「湧くはずのない所に、湧くはずのない湯が湧く」のように〝訪れる人々の知的好奇心を満足させて〟、2「芸者さんのビアガーデンをやろう!」のように〝逆手の発想〟で、汚いイメージの付きまとうトイレを、有馬を代表する名所にしたい。

そのためには、1「ギャラリーを創ろう!」のいろいろなネットワークやつながりを駆使し、創造性豊かなトイレにしたいとワクワクしている。

6 有馬に受け継がれているDNAとは?

入初式で飲んでいると、年配の芸者さんは僕の孫を抱きながら、親父ではなくお祖父ちゃんの頃の正月風景、芸者さんとお祖父ちゃんたちの様子を話してくれる。この芸者さんは僕たち親子のことを五代にわたって知っているということだ。

芸者さんという〝語り部〟のいる温泉地に育ち、その歴史的風土、文化的環境の影響を受けて、僕が始めた数々の試み、特に手作りゲームは青年部や息子たちにも衝撃を与えた。

彼らはいち早くテキヤを排除して自分たちで祭りをやり始めた。自分たちでやってきたからこそ、雨で流されても何度でも「有馬涼風川座敷」を再開できる力強さを持っている。

有馬は過去幾度となく災害に遭い、そのたびに復興してきた。その経験や何とか立ち直ろうという大事な意識が世代を超えて継承されているからこそできる、それがこの町に流れているDNAなのかもしれない。

最近は有馬にも外資が流入し、今まで付き合ったことのない人とも付き合わなければならないが、イベントや旅行という本物の共通体験を通した従来通りのやり方で説得し、納得してもらい、有馬のDNAをつないでいくしかないだろう。

今は、子孫からの預かりもの。長い歴史の中で、我々が温泉地の今を守っていくことは、何代も先の子孫へつないでいく大切な一過程なのだ。

（かない　ひろのぶ）

金井啓修（かない　ひろのぶ）

有馬温泉生まれ。株式会社御所坊代表取締役社長。一九一年開業の有馬温泉老舗旅館「御所坊」十五代目。調理師専門学校卒業後、北海道・定山渓温泉の旅館に入社。七七年有馬に戻り、観光協会青年部を結成し活性化に取り組む。八一年に二十六歳で現職に就任。個人客向けの個性的な宿づくりに成功。競売下の旅館を改装した「有馬玩具博物館」をオープン。商店街の空き店舗利用の飲食店経営など、まちづくりの牽引役、有馬温泉旅館協同組合専務理事、一般社団法人有馬温泉観光協会副会長も務める。